

54.10粉碎! 反合・三里塚・ジェット闘争

7・28集会での中野書
記長報告より(要旨)

われわれは「激闘の七ヶ月」に完全に勝利し、より強くなった。一方では「本部」側はボロボロに崩れ、全国で動労改革の火の手が上っている。動労千葉の勝利の根拠は「路線の正しさ」と「徹底した職場討論の作風」にあった。この勝利にふまえ、本日の集会はいよいよ八〇年代にむかって本格的な準備に入らねばならない。「敵が右に寄るから・・・」とグチッて右へ進むという今日の総評の惨状を見るにつけ、今こそ労働運動の原点をしっかりと固めて進むことが決定的に重要である。

七月二日、国鉄当局は「三五万人体制」への攻撃を宣言した。そして一六日、森山運輸大臣は「対話路線」なるデマとベテンで反対同盟つぶしの攻撃にうって出た。続いて二七日、空港公団総裁大塚はジェット燃料増送計画を当局に要請してきた。日本階級闘争の闘う軸たる反対同盟を解体し、日本労働運動の丸がかえ化に照準をあわせて総攻撃が開始された。八〇年代は、三里塚の闘いの帰すう、国鉄労働運動の勝敗によって大きく決せられることはまちがいない。三里塚・国鉄この二大陣地にどっしりと腰をすえ闘いぬく、わが動労千葉の歴史的使命はまことに重いといわねばならぬ。

産報運動と労働運動の危機

安定宣言路線は産報運動への転落だ!

(五) 天皇制と産報運動

一九四〇年一月一〇日〜一四日、「神武天皇即位以来」「紀元二六〇〇年」にあたるという奉祝行事が盛大に催された。戦時体制下「ぜいたくは敵だ」と物資欠乏の耐乏生活を、この日はかりは解除され、天皇の恩恵としての式典と祭典の中で全国が一色に塗りつぶされていった。

(六) まとめ

「石油危機」が叫ばれ有事体制下軍事大国化と元号法制化・天皇制強化の相次ぐ攻撃の中で、既成労働運動の「経営参加」路線へのめりこみが雪崩をうって進んでいる。「産報運動」のおぞましい姿は、今日、次第に現実の姿となつてわれわれの前に立ちあらわれてきている。「貨物削減・合理化」論、「貨物輸送安定宣言」をもって国鉄経営者と「一つ心」であることを表明した「本部」

二六〇〇年前は新石器時代の日本で「天皇が即位した」などと笑止千万な話であるが、このようなデタラメな「万世一系の天皇」を神と載く「国体思想」に屈服したところに「産報運動」が成長し独占資本家も労働者も「区別なく」あるのはすべて「天皇の臣民」であり、「支那人が果して近代国家を造り得るや。優秀なる日本人の支配下に大東亜共栄圏を治めることこそアジアの解放の道である」などというウソとベテンに塗りかためられた「聖戦」

この戦争体制の「神」であり元帥であった天皇は、決して「飾りもの」や「受動的な存在」などではなかった。世界の大国を相手に勝ち進みアジアに君臨することを喜びとし、その下で流されているおびただしい血と民衆の苦吟など全く当然のこととして「国内治安が悪い」「陸軍大臣は誰々にせよ」と政治を直接動かしつつ、戦争の陣頭指揮を直接狙っていたのである。この天皇の好戦的性格は「天皇の大権を犯される」ことを最も「面白くない」と憎悪を露わにし、明治天皇の日清・日露と勝ち進んだ大侵略戦争の歴史に対して「祖父の勲を最も尊敬する」という言葉によく表わされている。戦争の根本は、資本が自らの危機を乗り越えるために、新たな資源と市場、新たな利潤の獲得をめざして、行なう侵略戦争であり、労働者人民にとって